

名古屋の街と博覧会

— 都市発展の軌跡 —



池田 誠一

【2】明治名古屋の志…大都市への道

1 金沢・仙台・名古屋

明治時代になったとき、日本の大都市の人口は、三都と呼ばれていた江戸・大坂・京都が突出していました。その次が百万石超の金沢、六十二万石の仙台・名古屋だったといえます。名古屋は、明治22年の市制時に17万人(現市域に補正。以下同じ)で、金沢も仙台も大きく変わらなかったと考えられます。

ところが、それからほぼ30年後の大正9年。初の国勢調査時(1920年)には、金沢、

仙台がともに19万人弱なのに対し、名古屋は68万人弱と大差がついています(図1)。名古屋は明治の後半から大正へと、爆発的に人口が増えたのです。人口の急増の裏には都市の大きな変化が想像できます。いったいそれは何だったのでしょうか。

今回は、このように人口が急増した明治時代の都市・名古屋の姿と、43年に行われた博覧会、関西府県連合共進会への道程を追ってみたいと思います。

2 都市名古屋の視線

(1) 東部の開発

明治22年。名古屋区は、市制をしいて名古屋市となりました。その頃の都市名古屋の大きな課題は、港の確保でした。何度も政府に働きかけていましたが、遠浅の海なので武豊港や四日市港で十分というのが国の見解だったようです。しかし市域外であっても名古屋は熱田築港をあきらめませんでした。29年に着工し、港や付帯工事を続けたのです。

もう一つの課題だったのが市の東部の発展です。当時の名古屋の街は、堀川があり名古屋駅が新設された西側に発展が偏ってしま

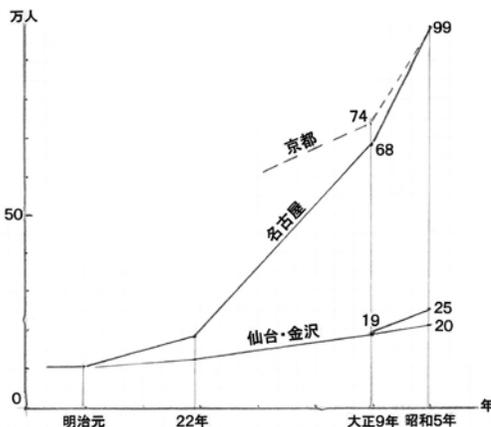


図1 明治から大正へと人口が急増した名古屋。京都に追いつく勢いがあった

た。そこで26年、中央線が名古屋まで建設されることが決まると、市は、東側、広小路通の延長上に東部停車場(現：千種駅)の設置を要望しました。それも、城北ルートと城東ルートがあった中で、東部を推進したのです。当時の地図には名古屋駅は名古屋西部駅。新しい駅は名古屋東部駅と記されたものもあります。駅の位置は、そこも市域外でしたが、土地を買収して国に寄付をしました。

この二つの事例からもわかるように、当時の名古屋市は、自らの市域にこだわることはありませんでした。いわば「大都市名古屋」に必要なことは、どんどん進めていくという積極的な市政を展開していたのです。そして、さらに大きな勢力を注いだのが、精進川の改修でした。

(2) 精進川の改修

当時、名古屋の東側の低地には精進川が流れていました。勾配が緩く、蛇行して流れる川は、汚水の溜まり場になっていました。そこに大雨が降ると、東西の台地から水が流れ込み氾濫して汚水が周辺に停滞し、さらには一帯が湖状になっていたといえます。このためその改修は下流の住民の悲願だったのです。しかしそれは大事業で、市も周辺の村も手が出ませんでした。

精進川を拡幅改修しようという試みは江戸時代にもありました。「東の堀川」をつくり、舟運を便利にしようという企画でしたが、財源がありません。明治20年代の終わりに、中央線の千種駅が出来ることが決まって、駅から熱田湾までの舟運を確保するために運河が計画されました。これは市長が市会で同意を得ていましたが、これも着手はできませんでした。

しかし、これらの試みは無駄ではありませんでした。37年、日清、日露と続く戦争で



図2 新堀川と鶴舞公園の位置。
大正10年大合併の後の名古屋市長全図より

東海道線熱田駅の傍に兵器製作所(東京砲兵工廠熱田兵器製作所)がつけられることになったのです。その土地は30畝に及び、大量の埋め立て土が必要になりました。精進川の掘削土を売却すれば経費の節減になります。精進川改修計画は急遽動き出すことになりました。そして、43年、市の東部開発の懸案だった精進川の改修は当時100万円という市費を投じて竣工し、延長5.7^{キロメートル}、幅約25^{メートル}の運河が完成し、翌年、新堀川と改名されました(図2)。

ここに計算違いがありました。工事を始めると掘削土が予想以上に出たのです。当時、市は本格的な公園をつくる必要に迫られていました。そこで38年、付近の適当な土地を買収して埋め立て、公園用地にしたのです。これが今日の鶴舞公園の始まりになりました。

(3)開府300年

名古屋は明治43年に「開府300年」という節目を迎えるため、市はその記念祭の準備にかかりました。40年の5月にはそのための調査委員が委嘱されています。

ちょうどその5月、三重県で第9回の関西府県連合共進会が開かれていました。その最終日の30日、次は愛知県でと要請され、愛知県知事は「施設等は一任」との条件でこれを受けました。

当時の名古屋は、県知事の深野(一三)、市長の加藤(重三郎)、商業会議所会頭の奥田(正香)と、三巨頭される人材が揃い、しかも「三角同盟」を組んでまとまっていた。10月の県会では郡部と市部の対立に巻き込まれましたが、郡部の八高建設を交換条件に12月には、43年の第10回関西府県連合共進会(以下、共進会)の開催が決まりました。名古屋市は、300年記念祭の多くを共進会の中で行うこととし、会場には埋め立てたばかりの公園用地一帯を提供することになりました(図3)。

明治末の名古屋は、道路、鉄道、港湾が整い、電気、ガス、水道などの供給もすすみ、着々とインフラ整備が進んでいました。その勢いの中で、経済界も活気を呈していたのです。名古屋は、人口増にも表れたように、着

	事業	予算(千円)	位置、内容等
施設	廟社	—	義直、慶勝を祀る
	待賓館	100	会場内、木造 400 坪
	演舞場	10	御園座借入
	ホテル	—	方法調査中
	水族館	98	築港埋立地
	園芸場	22	公園内、温室も
施設	イルミネーション	30	会場内、各館に
	奏楽堂	2??	会場内
	噴水塔	10??	会場内
催事	時代行列	2	300年の時代
	諸展覧会	5	美術・博物。徳川家も
	案内書、絵葉書、広告建札	12	市付近と共進会のPR

図3 開府300年祭の主な事業と予算。
明治40年当初のもの

実に大都市への歩みを始めました。

3 紀行新堀川

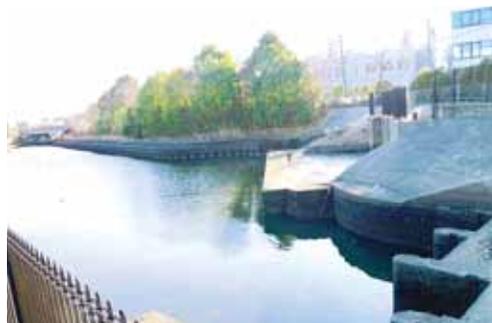
… 東部発展のキープロジェクト …

明治の名古屋がこだわった市の東部の開発。なかでも精進川の改修はそのキーとなるプロジェクトでした。そこで今回の紀行では、その精進川の沿線を歩いて昔を振り返ってみたいと思います。

〈熱田から〉

地下鉄の伝馬町駅を降りて、2番出口を出ます。東に進み、名鉄のガードを過ぎて新堀川の手前を左に曲がります。少し下ったカーブのところが水路の出口のようになっていますが、ここが昔、精進川の旧流路と熱田駅への姥子川運河が分岐していたところです。

川に沿って進めないで左に、姥子川運河



新堀川のカーブ地点にある排水口？
この位置から姥子川運河が分岐していた



新しくつくられた新堀川由来碑



この付近一帯が工場だった日本車両。
今は本社ビルのみ残る



公園内に立つ名古屋陸軍造兵廠の碑。上のマークは同廠の
マークで名古屋城の金の鯰をイメージしたものである

跡の道を進みます。突き当るので左に名鉄のガードをくぐり、線路に沿って進みます。この常滑線は、運河があったためJR線の西側に出られず、屈曲した線型も何度も改修されて今日の形になりました。突き当たった秋葉の地下道を通って線路の東側に出ます。右にあるホームセンターの中を抜けると新堀川です。川に進むと周辺は高層の住宅街に変わっています。川の両岸は駐車場で、もう舟運の痕跡はありません。2つ目の日の出橋は旧道にかかる橋で、熱田と瑞穂の台地を結ぶ郡道でした。橋の上流側に、新しく「新堀川」の由来碑が建てられました。

橋に戻り、西側の工場用地跡を見るため西に進みます。この道は神宮の真東の道で神門がありました。突き当たりの名鉄駅を右に曲がると日本車両のビルが見えます。明治30年、旧精進川を使って原材料を運び始めまし

た。当時の広大な敷地は、右に見える神宮東公園やその東の住宅団地になっています。

大きな公園を北側に抜けます。西の信号の左はファインセラミックセンターです。北へ、再び神宮東公園に入ります。ここからの公園、さらにはその向こうも、熱田兵器製作所の跡です。公園西北に、わずかにそれを示す記念碑がありました。公園を北に抜けると幹線道路で、向こうは日本ガイシです。兵器製作所はこの区画まで拡張されていました。通りを右に、新堀川に沿って進むと立石橋です。

〈鶴舞へ〉

橋を渡って東側を歩きます。すぐ左に東邦ガスのガスタンクが見えます。明治40年、ここも旧精進川のころから原材料を船で運びました。川の両側はほとんど工場用地ですが、もう舟運を利用している様子は見られません。

東雲橋を渡ると高架の中央線が見えます。



東邦ガスの工場。
当初は名古屋瓦斯といった



中央線との交差部。
手前に地平線時代の橋台が残っている

当時は平面でしたが、既設路線の下に川を通す大工事でした（下流の東海道線は、旧の川の橋のままです）。よく見ると高架線の手前に線路の橋台が残っています。

高速道路の下を抜け、富士見橋、宇津木橋と、旧道の橋を通ります。この辺りの両側は水運に利用した後が残っていました。所々に「公共物揚場」という石柱が立ち、川からの斜面が残っています。宇津木橋の手前右側には、精進川の溺死者を供養する石地蔵が祀られていました。

この付近を東に行くと鶴舞公園です。土はここから運ばれたのでしょうか。少し行くと記念橋です。共進会を記念してつくられた道路の橋です。東を見ると、鶴舞公園の緑が間近に見えます。幹線道路を横断して上流を見ると運河の終点が見えます。舟運はなくなりましたが、排水と、都市の貴重な水辺として明治のプロジェクトは生きているようです。



ところどころに残る「公共物揚場」の跡



新堀川の北端を望む

4 「大名古屋」を志した人

明治の初め、名古屋はインフラの整備で始まり、経済の活性化と相まって大都市への助走を始めました。その先頭を走った人がいます。市になる前の区長、吉田禄在です。

区長だった明治10年代、①港の必要性を解し、国、県にその整備を訴えました。また、②精進川改修も県に建議しています。さらに③名古屋城の金のシャチを国から取りもどし、本丸の離宮化に尽力したことで知られます。そして、④東海道線の誘致と名古屋駅の開設を国に働きかけ、市内からのアクセス道路として⑤広小路の拡幅延長を市民の寄付を募って実現させました。

しかし、その時、部下を切腹させてしまったことから区長から身を引きます。その後は経済界で活躍し、後に衆議院議員に推されています。30年代になって京都と争った⑥覚王殿(日泰寺)誘致も、その中心になりました。

彼の志は、港の建設を建議した時の文にその一端をみる事が出来ます。「…而して(熱田港の建設は)彼の江、勢、濃、飛、信、遠等の諸国未曾有の便利を得…」と。視線は、国土の中の名古屋を見ていたのです。

共進会の会場になった鶴舞公園東北の高台、今の野球場周辺は彼の別荘地でした。鶴舞で共進会の実施が決まると彼はそこを全て市に寄付しているのです。そのため今では吉田山と呼ばれています。

〈主な参考文献〉

- ①同編集委員会『新修名古屋市史・資料編近代2』
(2009、名古屋市)
- ②城山三郎『創意に生きる—中京財界史』
(1994、文春文庫500)
- ③朝日新聞名古屋社会部『明治・東海政治史』
(1975、六法出版社)
- ④各市編『大都市統計年表・H22』
(2012、大都市統計協議会)